



鳩翁道

709
145



天保甲午夏六月朔迺夕獨
坐於齋中葉田氏之子偶來
訪云請餘暇閱世書且附一
言即取而覽之乃其所隨錄
乃翁之語而命曰鳩翁道話
者也曰審其文言則似戲而

龜山先生

悉是孝弟，實說外若，俚尚
不乘聖賢之旨，語曰：道在尔
而求，法在事，在易而求，諸難
今如弱之可理，於德從其通，且
易教流世俗者，實有勤矣。覽
者捨其言，辭之俚近，而取意味。

深長者以為修身齊家之一助
便是弱之本意，善云爾。手島
毅庵識於五樂舍之南窓。



Vertical text on the left margin, possibly a page number or reference.

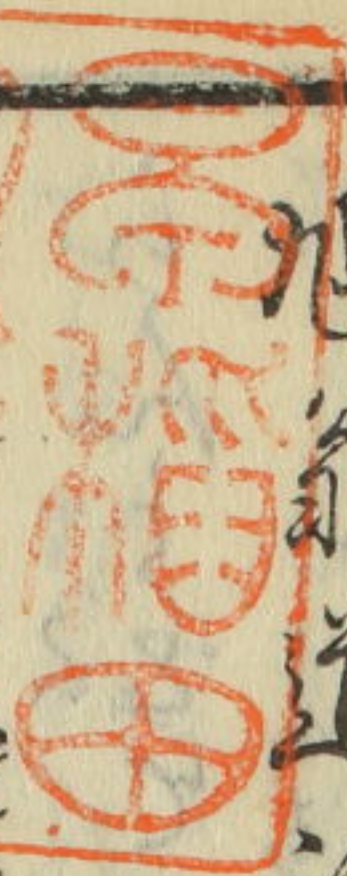
不承... 殊哉... 然... 然... 然...



明治六年十一月五日

坪内権蔵氏贈

鳩翁道活を之上



男 武修 研書



孟子曰。仁人心也。義人路也。舍其路而弗由。放其

心而不求。哀哉。是ハ孟子告子云。小人

の心。本心也。ざらり申す。扱け仁と申す。緒先生

の心。本心也。ざらり申す。扱け仁と申す。緒先生

の心。本心也。ざらり申す。扱け仁と申す。緒先生

の心。本心也。ざらり申す。扱け仁と申す。緒先生

の心。本心也。ざらり申す。扱け仁と申す。緒先生

門七
號 109
卷

...

仕指しをいひえん基もそのまゝをうて。おのかり
 ましなむ。又枕の侍もしとなつてをぬやう
 さんざい えん基のあぶき指しつひまゐる。
 まうまじば親由さゆと親由さゆとつらうに
 けうじ。お若りなまらうが。子らその有づま
 やう。是に仁なり。人の心ごとくまます。かやうに
 ありと。糸ののらうやうなまじも。別
 此路とよの心んが。トント。其程のなるにの丸
 へん。いまあまうさ方の心んが。居あらしと

して居ますのぢや。よそ半のやうにおかめさうに
 てい速速とぞんじますと。めいろうさ方の親由へ
 びとる人とうまらう。まゝ親をほせらう。まゝ人
 配せせらう。難儀とけらう。まゝ後と直とせ
 らう。女房おんばいとしけらう。中をふらんごう。見
 を悔らう。世間へ難儀とけけらう。あつめて
 とぬらひ。又身をばしとせらう。しつものしや。
 心當おんた指の人柄にござらう。しつもの。天竺の
 横所へ。け連中。ごんとある。心当らうませ。はく

つく思ふとんまぶ。き地のもるん生しきとて。つ
 方りござりませぬふ。幸よはござりしとを理乃
 ちん心と持てしむしゆとい。千万金も終る
 まぬ有がふ事ござりませぬ。そのを理の
 まんを我ちと奉んと申す。むに仁と
 奉んとする人あまよつと。まことの君御の
 けきとを。そんなるの味すとせうなる。
 唯奉んとを理のまのとおかだしめと。ま
 りがしいござりませぬ。今日各極一歩一人く

内目おひらつと。かめくも方のかん
 ととしもを理とござりませぬと。新まする。
 を理扱ら。いませ。き事とつらぬ。すゆき
 ちゆとすと。忽ち後の中がわらうん
 ちんくる。是を理乃ちん心と申す。むに仁と
 の忠んが。ゆらきとんござりませぬ。守る
 のまき。ちん人。まほござりませぬ。古歌
 唯理のよれ。あふとちとちる。むござりませぬ。やとる。月と
 ちと月と。いつなまごもらる。むござりませぬ。あふとちと

属ぞす天理の妙用。仁を以てつるの仁なきを
 可人まはせとて、情を病まらるるを中一の
 人のつらふを理のなるといふ事、うまひと勤
 定が出来ます。この不情をけりて理のまは
 事ごつら。わざとすれば、皆つらき中つら
 孝り忠義もわづら。おそれます。ナニとやい
 学問ごらるるをせぬ。タツタ一ツ合点すると百年
 学問ごらるるをせぬ。タツタ一ツ合点すると百年
 ませぬ。ドブ本は、心志をひきまへ、是を先生

として、心持をなせらるるごらるる。我
 本心、作道不すまじ。心後義もいはず。思心
 の心也。心かよはず。心やう忠孝をはとせぬ。
 わりごひとてごらるる。志をいへるやう
 心ごひの起るものや。志をいへるやう
 心賞ごらるるの心。げひのつらごらるる。押
 切本心。心かよはず。心やう忠孝をはとせぬ。
 ます。中庸の率性之謂道とて、思心
 情心ごらるる。心ごひをいへる。心かよはず。

伊也。叔義人路也。とて義といふの義理とせぬ。す
 べからざる。とせぬ。とて人交るのゆふおろす。すべからざる。と
 交るゆふ。かたがゆふ。おち人義者宜也。と作す。
 ゆふ。家其ゆふの甘ふ。精と出さる。ゆふ。
 妹とて。舅姑。孝り。夫と大切。す。ゆふ。
 い。や。ゆふ。ま。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 義で。こ。ゆふ。ま。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 古人曰。道猶大始也。と。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 孝く。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。

けりも。皆そましく。ふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 根。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 と。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 人。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 ませぬ。子。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 信。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 たり。ま。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。
 たり。ま。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。ゆふ。

おふ川へとまらう。新の中へけはらう。さぶへ
 飛こんだらけるとは、半で扱を難後子方な
 らのでござります。むらひとあうふあやう。さくと
 考へ給むめまを幸い中はるこ先生のぬ
 らまうと承り候へまこと半がござります。席はぬ
 けりやまらう。中沢先生いし世橋名地因
 名後くまらまゆさ。つる嘉家不違ぬらう
 不。その家乃主人らう。心学執心の念。見
 生をりそなり。のつまり十はぬらう。娘と呼ば

通二先生と召喚させらまゆさ。は娘の容後も
 すぐは幼も。花をつき茶をくそ琴をひき
 師の先生とたぬぬ。款をむとらまらう。ソコテ
 先生その親らへ挨拶ふ。そがとふおそとらう。し
 ろの。あうくの事ていあうらまらう。し。おやう
 が園のり。嫁入し先方で死をうとまらぬやうよ
 と。只今うし。おふ。相明花むしび。魚もゆし
 おをせゆこと。吹くと娘り傍。ソコテ先生がそまら
 中へ大さの。あうらまらう。まらう。まらう。

ういさーん。ゆてち娘乃子小琴と味せん
 けいこ 結うおさき 養者の風俗とんおつと。じゃみ俗を
 しやめ 娘しうとごらうがすうふとごらうまうて。親の目と
 ねずんご。迎るうをうらうがまうらうまう。これい
 娘心のうらひのじやまの。親心のとそこのうらひの
 じゃ。む琴と味線娘と浄うら。やふなぬと
 中のでいごらうませぬと。はけとんまうまうまう。
 娘と一ツごとと。はまがとすめおとらうまうまう。
 へごごのまう。ア。はつのはとやうらうらうらうらう。

「うさ中のなひとあぶらうらう。花のゆづり
 らうらうらうとけ唱あぶら考なさんらうらう
 ぐませ。まうらうまう美い男と女と。親のゆづめ
 縁しすひ。面白うらうと思ひのやう。かりうらう
 ながらう。はひをの中じやとあうらう。か入ち
 せまひのいと。後悔と文わらうらうまう。こん
 ろまのせらふのゆあま。娘とまうらう面白か
 うの。世帯と持らうらうまう。かうのと。端尻こが
 らぬ。相あ練のムチャクチャあふ。思ひのかと不

九編 新編 一

らぐひます。つと大町達ふなるものてござります。す。
 更うと味せんを煮つ。焼入るるふ合さうと
 思入る。思の如ふる。合ひ。焼入せぬ。さきふ
 思ひ男とく。く。さるの。皆目の付やれ
 らぐ。焼く。や。さ。面白い。信がござります。
 いう。系ふす。陸が。大坂と。ん。おせん
 ち。居ま。け。春。か。ひ。難波。名。お
 え。お。出。け。の。遠。西。の。向
 の。明。林。る。の。街。屋。を。山。崎。く。出。天。と。山。の。が

そ。か。り。ゆ。と。又。大。坂。と。都。ん。お。せん。と。お。り。い。ま。と
 う。ひ。り。有。く。さ。も。あ。街。屋。津。川。あ。さ。川。高。柳。山。崎
 と。お。け。天。と。山。の。が。り。う。ら。山。の。難。波。あ。方。が。出
 合。ま。さ。う。ナ。ガ。系。ふ。仲。る。は。志。な。ま。ぶ。あ。ん。く。の。志
 と。ら。あ。い。板。あ。方。が。う。板。い。け。中。ふ。ら。い。目。を
 して。漸。と。ま。ご。中。行。じ。や。さ。く。互。ふ。系。大。坂。へ
 ち。な。る。が。足。も。腰。と。た。ま。り。ま。い。な。ら。う。あ。ふ。あ。入。天
 王。山。の。類。系。も。大。坂。も。一。面。こ。ん。さ。す。あ。が。や。ナ。ト
 系。ふ。足。つ。ま。さ。く。脊。の。び。こ。ん。お。い。さ。の。い。つ

ぐ。おまごぐとらうぎあつても。天下のいさぎをあた
 へて。スツポンのろくろと合ませぬ有らうい年一うと
 海を平ふとさまり。赤仁政のいさぎの限もなく。
 そまぐの心後人さぬ。夜のゆり昼のまのり。
 心ゆりのさうさうさうさうさうさう。夜招のト
 舞をいぬらうさうさうさうさうさう。細工でさ
 のさうさうさうさうさうさうさうさう。あまぐとさ
 ね表の戸とメとと味くさうさうさう。まらさうさ
 月んくさうさうさうさうさうさう。その月んい

じんか用んじや。はか板をまひ。さうと裏表う
 けづりくさうさうさうさうさう。ゆかどの用んじやと
 さうさうさうさうさうさうさう。位じや。さうさ
 盗賊がさうさうさうさうさうさう。チト思案して
 らうさうさうさうさうさう。赤上棟の赤仁徳。さ
 うさうさうさうさうさうさう。真加のさうさう
 ずふ。おまごぐとさうさうさうさうさう。こら
 の尻代ら千世目作。ゆけは移さうさうさう。六百年
 や七百年のあそんでらうさうさうさう。さうさうさう

家屋敷が十廿五ナホ。かつけの御女が二百廿目
 こそほどつくと。古作がうらうらと著せると又十年や
 百年の貞念けり氣づいていな。資中目
 一の陸うらうらしうんげの貞義目大丈夫か
 要害也。ゆんをねらひなりませぬ。森てわり
 うらうの波の大松明しなうらう大地着が
 らうやう知まぬが浮在のうらうさきでござります。
 けねまきぬとつうはつ。今一ツ作があれ。
 眠さうしふ徳うさう下うりませ。アノ榮螺とちり

貝らも丈夫な手厚い貝ぞ。志くも丈夫な蓋が
 あつソコデの榮螺がゆくとつと。うらううらうと
 ぶらう中りメも。大丈夫半しやとあつて居ます。
 綱や籠がうらう中りメも。コレさうえや。お主人の要
 害も大丈夫なりのや。うらううらうとあつて居ます。
 さういふ外うらうのゆくとつと。結核の尻の
 うらうやとつと。榮螺が盤とあつて。お主人の方
 ぞ指しつと。うらううらう。うらううらう。ゆんぞう
 ない。あうらううらう。うらううらう。ゆんぞう

のまゝにせむ。是をとらふ放其心而不知求たづねと作つく
 らまゝのまゝにござります。此この事こともわが身みへ立たてて。
 こまの味あじもつゞ。たがゆへくも目の
 光あかりが教しん心しんごござります。教しん心しんじやこいも心こころが
 死しで志しまゝのまゝにござります。身みよまゝに
 事ことの物ものめつゝ。まゝにまゝにやまゝ。
 今いま私わたしの事こともまゝにござります。思おもふとこの
 事ことの事こと。知しとこの事こと。分わ別べつとこの事こと
 かとこの事こと。指さ式しきとこの事こと。こゝにまゝに。大おほ夫おと

まゝとわがまゝにござります。榮さか標ぶの心こころ連つ中ちゆう
 事こともまゝにござります。此この味あじが心こころ
 要いごござります。休やす息み

